グローバル化時代におけるスポーツ用品製造業と南北問題

— サッカーボールの生産を中心として —

A study on the sport manufacture and the North - South problem

—focusing on the industry of football—

1K04B210-8

真子 和幸

指導教員

主査 石井昌幸先生

副査 寒川恒夫先生

研究の動機、目的

サッカーは、現在最もグローバル化が進んでいるスポーツであり、世界中の人々を熱狂させている。このサッカーを支えている、最も重要で基本的な道具はボールである。しかしそのボールが、インド・パキスタンを中心とする南側の国々で、悲惨な労働条件のもとで働く児童によって生産されていることはあまり知られていない。そこでは北側の先進国のためにサッカーボールがつくられており、途上国の労働者の人権を無視した搾取労働や児童労働が当然のように行われている。これは現代における南北問題を象徴している。

そこで、サッカーボール製造業における労働実態の研究をし、それに対する各機関や NGO の取り組みとその効果をふまえ、今後の南北問題の改善や児童労働の撤廃への糸口を探したい。

各章の要約

第1章： インドとパキスタンの両国がサッカー発祥の地であるイギリスの植民地であったことが、現在となくともサッカーボールの生産拠点であることに大きく関係している。この頃のサッカーボールは牛や豚の膀胱を膨らませて、その表面を皮革で包んだものを使用していた。特にヒンズー教徒の多いインドでは、大量の牛がいたものの、宗教的習慣として牛を畜殺することが出来ないため、良質な皮を手に入れることが不可能であった。一方のパキスタンではイスラム教にはこのような禁止事項が無かったため、良質で安定した生産が可能であった。

児童労働がこれらの生産現場で見られる理由としては、1960年にFIFAがボールに関する規定を変更し、皮革以外の素材の使用が認められたこと、その規定の変更後にボールに使用されるパネルの形状が変わり、以前より簡単に球形を作れるようになったこと、諸々の技術の近代化が進むにつれて児童でも従事可能な工程が創出されたことがあげられる。

第2章： 1990年代半ばにホンジュラスの衣料品工場で働く少女の訴えにより、過酷な児童労働や搾取労働の存在が社会に認知されるようになった。その様な社会の風潮の中で、パキスタンでのサッカーボール産業における児童労働がメディアに取り上げられた。それにより、戸籍制度が整っていないため幼い児童が働いていることや、暗い部屋での長時間労働、安

い賃金や体罰の存在が明らかにされた。この児童労働は教育として意味のある Child Work ではなく、身体的精神的道徳的に有害とされる Child Labor とされる。家での作業が可能であるため、学校に通いながら働く児童が多くいるが、高学年になると次第に通わなくなる確率が高い。

第3章： 南北問題の象徴とされるコーヒー産業に従事する者のうち、少なくとも2500万人の人々が生活収入をコーヒーに依存している。1998年1月から2003年12月の間にコーヒーの国際市場価格が半減したため、生産コストよりも低い価格でコーヒー豆を売却しなければならなくなり、その結果、彼らの生活は貧困線を下回ることとなった。生産者のほとんどが小規模生産者であるため、家族を含む児童労働の使用による人件費の削除を余儀なくされた。そこで働く児童は防護服などを身に着けずに作業を行うため、農業用機材による怪我や、農薬による健康被害が出ている。

この状況はインド・パキスタンにおけるサッカーボール産業と重なる部分が多い。サッカーボールの消費も絶対的に北側に偏っている。手作業で行われる工程を含み、1日で作ることが出来る数量が限られているにも拘らず、サッカーボールの市場価格に対して、その労働者が得る報酬はあまりにも少なく、またヒンズー教のカーストの影響もあり貧困から抜け出すことが困難となっている。

第4章： インド・パキスタンにおける児童労働に対する取り組みとして

- 1 FIFAの取り組み
 - 2 アトランタ協定
 - 3 SGFI(インドスポーツ用品基金)の活動
 - 4 フェアトレード
- の4つを取り上げた。

第5章： 第4章の活動の効果と櫻庭の主張をふまえ、児童労働を撤廃するためには、技術的な変化による児童労働の需要の減少と、実質的賃金の上昇による児童労働の供給の減少が必要であるとして、糸を使わず機械生産できるようなサッカーボールが世界の基準となるような技術開発と、生産者が正当な報酬を受け取ることが出来る、フェアトレード商品を積極的に購入する社会の取り組みが必要だと提案した。